やり直しのできる社会を！

新宿連絡会NEWS

2011.12.5
VOL. 58

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10
関ビル106号　NPO新宿気付
TEL.090-3818-3450 FAX.03-5273-6895
http://www.tokyohomeless.com

やるせない冬

笠井和明

生活保護世帯が過去最多の205万人と発表されたその週の始めに、新宿の繁華街の片隅にある老朽化した「ローズハウス林荘」で出火、高齢の単身暮らしのお年寄りなど４名の居住者が亡くなり、２名が意識不明の重体となる事故が起きた。生きる残るための生活保護適用などが、まさか死出の旅路になるとは誰しもが思わなかったが故に、大きな衝撃が走った。

1980年8月の新宿駅西口でのバス放火事件、1998年2月の新宿駅西口ダンボールハウス火災事故、直接新宿とは無関係であったが2009年3月の「静養ホームたまゆら」火災事故、我々が経験した事柄だけでも、火にまつわる事件や事故は、下層の現実を残酷にも浮かび上がらせてしまう。

我々の仲間は何故狂気に走り、何故無惨な最期を遂げてしまうのか？それが「火責め」以来の課せられた宿命であると言うには、あまりにも酷すぎ、そしてあまりにもやるせない。

こうして、我々の冬がまた訪れる。

何度ため息をつき、何度茨で血を流したら許してもらえるのだろうか？

闇の中の鎮魂の旅路は、今も続く‥。

今回の事故は、しっかりとした非常階段やはしごもなく、管理人もなく、老朽化し、居住者に火災保険すら課していなかった設備面、防火管理の問題がまずは問題となるのであろう。

そして、それに付帯する問題として、独り住まいの高齢者や障害者に対する思いやりのない地域社会の「崩壊」や、制度上の限界も問題となるのであろう。

「都会の独居老人の悲劇」などと報道されているよう、ある意味では良くある悲劇的な事故である。東北の大震災を経験した我々からすれば、それはささいな事故なのかも知れない。

単なる事故に何故それほどこだわるのかと問われるかも知れない。けれども、我々の住む地で起こった、我々の仲間が、望まぬ死を強いられた事は事実であり、それが失火であったとしても、誰にも過失がなかったとしても、その不自然さの前をすれば、こだわらざるを得ないのである。ある意味、そこにこだわらなければ我々の存在意義すら見いだせなくなってしまうのである。

主体的に思考すべきは、路上から施設やアパートに移行させる事が単なる「目的」となり、「その後」の事をまるで考えない我々の誤った思考こそを捉えなければならないのだろう。困窮者の存在

を「人」として扱わず、「数」や「物」や「政治」として考えてしまう、そして「敵」を作り、それへのたたかいがいかにも「正義」のように演出し、結果として困窮者を利用したり、無視したりと、勝手に踊りまくる、この都会ならではの悪しき発想である。

誰かのことではない。皆そのような危険をもっており、その危険にさえ気づかない者がいかに多いかと言う事であり、我々は一体これまで何を見ていたのかと云う敗北感である。

生活保護制度の是非であるとか、セーフティネットがどうあるべきであるとかの数々の評論は、今はとにかく空しく感じる。

どう地域で生きていくかを共に考えず「金」だけ渡したり、「金」や「住宅」を貸し付けたり、そんな事だけで、本当に人は救われるのであろうか？もっと大きな災害が起こらなければ「絆」と云う抽象的な言葉ですら、この都会の中で思い起こされないのであろうか？

ホームレスの社会でさえ、長期化、高齢化が問題となっている今日、「高齢化社会」と云うのは周知の事実として認知され、福祉施策、住宅施策とも重点課題として、国や自治体において、さまざまな取り組みが行われているのも、これまた事実である。もちろん、そこに様々な人が居る以上、決定打がある訳もなく、今後も官民での試行錯誤が続くのであろう。

しかし、その一方で「久しぶりに人と話した」と笑う独居老人が都市の狭間に点々と存在し続けている。かのアパートから焼け出された若い仲間ですら「年寄りばかりで、いつかはこんな事になるのじゃないかと思っていた」と語るほどの状態は、都会の中では、まさに氷山の一角である。

享楽の施設しかない繁華街、「金」でしか関係を作れない何とも言えない人間関係、関係を作ることが利用したり、利用されたり、時には犯罪に巻き込まれたりもする新宿と云う街。貧乏であればある程、孤立感を深めざるを得ない街。

新宿と云う街は路上生活をするには快適な場所であるが、そこで独りで暮らすにはとても勇気のいる場所である。

どこかの都市から住み心地が良いからと流れつき、困ってしまった段階で、何も考えずに生活保護を受け、施設に入っている頃には仲間も居て安心感は多少はあっても、次のステップで一人でアパートに暮せば、そこには地域との関係も薄く、騒ぎあえる仲間も遠く、体力の衰えと共に、次第にひきこみりがちになり、アパートの中で酒びたり、なんて言う仲間に我々は幾度ともなく出会っている。出会ってはいるが、そこで立ち止まったままである。

若ければ仕事なりの社会参加の道は残されているが、年齢を重ねれば、今の市場はその比率に従い排除の度合いを重ねる。要介護ともなれば居宅介護等サービスが受けられるものの、それとて要介護認定は厳しいままで、しかも、「在宅」は家族の元での「在宅」を基本的に想定されているようなので、一般施策の中で「アパート単身独居」と云う問題は隅に押し寄せられたままである。

そもそも地域の人間でない者が、地域の中でどちらかと云えば忌み嫌われるアパートなんかで出入りをしたとしても、気にも留めないのが現実でもある。

生活保護ならばケースワーカーが居るだろうと云う向きもあるが、アパート訪問は厚生労働省の指導では最低年２回でしかなく、とてもワーカーが追いつかない現状が、これまた生活保護世帯が増え続ける都会での事実である。もちろん、それぞれの実施機関でそれ以上の訪問を強化したりもしているが、そもそも生活保護制度は、人の高齢化問題であるとか、介護の手間であるとか、見守りの手間であるとか、社会関係の再構築であるとかには、まるで無頓着な制度であるので、そう云う制度をそのままにしてケースワーカーだけに責任を負わす事は、かなり無理がある。

NPOと云うのも一つのファクターであるが、見守り等をやるには、地域に相当根ざしていなければ不可能であり、それなりの規模もまた必要である。

福祉で雇用をとのかけ声空しく、居宅介護事業所でさえ経営が厳しく、また労働条件もまた色々と取り沙汰されている今日、そうそう単独ではやりきれ

るとは思えない。

言い訳がましく言うならば、実験的な事は官民協同と云う形で実施はされている。見守りに関しては、NPO新宿は「中野区高齢者居宅介護事業」を受託し、ケースワーカーと連携しての訪問活動を昨年度から実施し、また、高齢者の居場所作りとしては、新宿区からの受託事業として「自立促進事業」での各種講座やフリースペースを被保護者に開放している。

しかしながら、これらはまだまだ小さな規模で、しかも生活保護世帯限定の事業でしかない。

高齢化と云うのは当然の事ながら、年を取るごとに押し寄せてくる。元気な姿しか覚えていない仲間が、久しぶりに顔を合わせると急に老け込み、動作も緩慢になっていたりする事もよくある話である。ADL(日常生活動作）の低下が誰の目にも分かる頃に養護老人ホームなどに申し込んだとしても、常に満床で、判定までに時間がかかり、また、実際の入所待ちは数年に及ぶ。その間に独居で亡くなる仲間も多い。

医療改革の名の元社会的入院の解消が叫ばれ、病院は施設ではないのはその通りなのであるが、代わりに施設が増やされた訳でもないのに、これがいつの間にやら当たり前の姿となる。居場所を失って、身寄りのない者は、都会のアパートで障害を抱えていたとしても、傷病を抱えていたとしても、ひっそりと暮らさざるを得ない。

都会のアパートは、何かを隠すために存在している訳ではなかろう。だったらアパートを施設化させたら良かろうと、東京都は昨年度から「都市型経費老人ホーム」を制度化し、運営事業者を募集しているが、いくら整備費に補助金が出たとしても、このホームが雨後のタケノコのよう、都内各所で点在させようと云う地権者の勢いはどこにもない。東京の地権者と云うのは、たまたま一極集中し、高騰した地代の上に胡座をかいているだけなので、公共の概念とはまるで正反対の存在のようである。もちろん中には良心的な地権者もいるだろうが、残念ながらそれはごくごく少数派でしかない。となると、この「ホーム」も設備のみならず運営にも相当の公費をつぎ込まないと、政策的には成功しないだろう（失敗した「高専賃」の二の舞？）。

つまるところ、資産を持っていたり、そこそこの年金を貰っていたり、家族があったりと、「普通の高齢者」には手厚いサービスがこれからも出て来るだろうが、その「普通」から弾かれた高齢者、つまりは我々の仲間達は、ますます居場所を失いかねない危険を孕んでいるし、現実はそうなっている。そして、そう云う事を目立たなくさせているのが、都会と云う混沌とした機能である。

東京への一極集中と都市と地方の産業や人口の偏在がどこまで続くのかは分からぬが、見事に餌食にされてしまうのが、そこでしか生きられない人々である。

かつてはこの都にも渋沢栄一で有名な養育院がいくつもあり、一時的なものではなく、しっかりと制度化されていた。内実は前近代的な隔離政策ではあったものの、それでも都市機能の一部を明確に担っていた。もちろん当時の医療水準や平均寿命を見るなら、そこそこ回転していただろう事は想像出来る。

都市故の構造だけは当時と今とまるで変わっていないどころか、悪化しているにも関わらず、肝心な機能だけはいつの間にやらどこかへ行き、低所得者の高齢者はホームレスの時と同じく、都会の片隅を転々とせざるを得ない。

最近はホームレス問題と言えば、若年層失業者や困窮者の問題をベースにした生活保護やらセーフティネットばかりが取り沙汰され、評論され続けて来たが、そんなぴーちくぱーちくをしている内に時間を重ね、人は年を取る。ひきこもり問題が若者問題として設定している内に30代、40代へその主流が移行している現象とどこか似ている。問題は次から次へと進行していく。当たり前の事であるが、この社会では当たり前ではないようである。

主体的に言うならば、我々は路上の問題や、路上からの脱却と云う問題にかまけて、その後の高齢化と云う問題にあまりにも向き合ってこなかった結果である。

我々が新宿で路上の人々と出会い、共に現状を変えようとしたのが18年前。当時のおっちゃん達は50代が平均で、となると今や70歳前後。当時比較的若かった仲間は時折顔を出すが、それでももう

60歳前後。もちろん全員が不幸な老後を送った訳ではなく、路上での共同意識が強かった当時の仲間は、路上脱却後も職場や、地域での自分たちの関係を作り、人生を全うした仲間もいる。しかしながら、我々が見えていたのは一部でしかなく、どこへ行ったのか、生死すら分からない仲間の方が多い。もちろん我々が知らなくとも良いから、それぞれ勝手に生きていてもらえば良いのであるが、それでも不幸な死に方をした仲間の報に接すると、こんな筈ではなかったと無念を思う。

もちろん、今何が出来るかと設定すれば、とても空しい現実でもある。我々がすぐにでも出来る事は、知り合えた仲間の「その後」の事を、寄り添いながら、愚痴を聞くことしか出来ないのかも知れない。そう云う地道さと、地域性を培う事なのかも知れない‥。

なんだか、いつもの出だしとは調子が違って来たが、こうして新宿18度目の冬が来る。

新宿の路上の景色は昨年とそう変わりはない。変わりようがなかったと云うより、大震災の年でもあったので社会は路上どころではなくなり、変われるきっかけは例年よりも少なくなったと云うところであろう。

もちろん、こればかりは仕方のない事で、震災後ボランティアを乗せたバスを遠くから見送り、反原発のデモの群衆に恐れをなし、炊出しの場所を移動したりと、目立たぬよう、ひっそりと暮らし続けて来た。ボランティアの数も日に日に少なく（適正規模になっただけであるが）なり、地道な活動だけを仲間が中心となって担っている。

多くの仲間のふるさとも津波で流されたりもした。東北出身者は東京の路上には多く、諦めの中で安否確認すらしないと云うか、出来ないと云うか、そんな仲間も多かった。「東京に出て来てて良かった」。ふるさとを捨て、おそらくもう二度と帰る事はないだろうおっちゃん達のつぶやきは、とてつもなく重かった。とうていお気軽な気分にはなれない、辛い一年でもあった。

夏を過ぎた頃からは路上の景気も幾分か持ち直して来た。震災復興の影響も見え始めて来ている。ボランティアとしてではなく、労働者として若い現場系の仲間などは東北の地で働き始めている。一時的な活況かも知れないが、それでも冬の前に稼げる場所が多くあるのは幸いである。

東京への過剰なまでの若年層困窮者の流入は、そんな背景もあり、一時よりも少なくなっている。他方でいろいろな施策においでおいでと入れてしまったので、その後の混乱は未だ続いている。働く事や、都会で暮らす事に慣れていない都会に滞留した若者に何らかの希望が指し示せるのか？ここら辺は大きな課題であり、下手をすれば犯罪予備軍のようにもなってしまうのが、都会の恐ろしさでもある。

都内においてのホームレス数の明確な減少は、テント生活者の減少と直結している。緊急避難としても同じような事は再び出来ないものであるから、今後新規でテント生活が急激に増える事もあるまい。その代わりに移動層、流動層と云う数値化しにくい仲間が主流となっている。今や炊出しがなければ全体が捕捉できないような時代となっており、何でもそうであるが、問題化や規制がかかれば、フォーマルからインフォーマル、アンダーグランドへと自らその姿を隠そうとする。これが民衆史のおもしろい所であるが、それを見続けて追いかけて行くのも、覗き見趣味のようであまりお薦めの職業ではないが‥。

時限立法で制定された「ホームレス自立支援法」も来年でその効力は途切れるが、10年やって目に見えるところを半分以上減らしたならば上出来の部類であろう。しかしながら、「自立支援」と言いながら、近年は「減らす」事だけが目的となっていたキライは否めず、先に論じたような様々な問題は置き去りにされていることを、そろそろ自覚すべきであろう。

こんな中途半端な状態で幕引きを図り、路上生活者に対する自立に向けた条件整備の努力を国が自ら放棄するのであろうか？

それとも「ホームレス」はなかったことにして、皆、貧困者とごった煮にし、過去最高になったとしても、そんなの関係ないやと「その他世帯」も含め、生活保護制度に収容先を定めるのか？

いずれにせよ「減らす」であるとか「隠す」と云うのは意外と簡単で、そこそこの予算をつけて、ハードであろうが、ソフトであろうが隔離して、収容してしまえば良いのである。しかしながら、それが問題なのではなく、彼、彼女らが自助、共助、公助も含めてどのようにこの都市の中での居場所や生きる環境を意識的に作り出すのかこそが問題なのではないのか？その観点からすれば、そうそう簡単にはいかないかも知れないし、もちろんそれだけでは解決などしないのであるが、それでも、自立支援と云う後腐れがない「トランポリン」を都市機能の中に

設ける事は決して無意味な事ではない。

都市の機能として「養育院」が必要であったように、「労働下宿」もまた必要なのである。そうでなければ「養育院」はすぐにでもパンクしてしまう。まあ、いずれにせよ、この静かな冬からしか、何事も始まらない。

冬だけ人は困るのではないのであるが、路上から言えば、冬はその困った人を安易に殺してしまうからたちが悪い。なので、冬将軍は昔から忌み嫌われ、嫌うだけではなく、それとのたたかいを挑み続けている。我々の重点的なこの季節の行動が越年越冬闘争と云われる所以である。その行動は、世間がここまで格差を感じていなかったオイルショックの頃から、日雇の仲間が集まる寄せ場の地で、そしてバブル崩壊以降から新宿を含め路上生活者の集住地域で黙々と続けられている。

そして、今年もまた同じ事を続けるだけである。

炊出し数の推移を見ても、今年は年末になり急増する気配もなく、まことしやかな「都市伝説」が流布されてもいない。東京都もようやく気がついたのか、おかしな事をする気配もない。淡々と年を越し、１月、２月の厳冬期に向かうだけである。

もちろん高齢者、病弱者の避難場所として昨年からNPOで運営されている緊迫施設の「馬場ハウス」の枠も拡大し、都区の厳冬期宿泊とも連携しながら、越年越冬の基本である「高齢者、病弱者を守る」事を、「その後」の相談や関係作りも含め定着化させたいと思っている。

圧倒的な仲間の数やニーズに比して、誠に微々たる力でしかないが、この地を守る事が課せられた宿命である以上、仲間と共にどうにかこうにか、前を向いて行きたい。

今年も皆様のご厄介になりながらしか、連絡会の冬越しは出来ません。何があっても路上の仲間へとの物資等のご寄付、大変頭が下がります。その期待に応えるべく、この都市の中での居場所を我々は我々の力で見いだして行きたいと思います。

今期もまた宜しくお願い致します。

路上調査を今年も実施しました。

例年実施している「炊出しに並ぶ人の年齢調査」を２月に実施しました。今年は当会の炊出しに集まった317人の協力を得て聞き取りを実施、結果は平均年齢55.4歳、最低年齢25歳、最高年齢83歳、55歳から64歳までの年齢層の人は全体のほぼ半分の44.5％を占めており、その比率は昨年より高くなっています。60歳以上の高齢者も全体の39.2％を占め、調査を重ねるたびに高齢者が増加している事が明らかになっています。

調査結果は当会ホームページに掲載されていますので、詳しく知りたい方は閲覧下さいませ。

新宿メーデー、今年も頑張りました。

第17回新宿メーデーを今年も開催しました。新宿や池袋の仲間など170名が参加し、震災後の危機の時代こそ仲間の団結をとの思いを強くしました。集会では山谷や三鷹で70年代から活動を続けているお二人の仲間から「仕事を求めるたたかいこそ原点」との深い話がなされ、一人ひとりの現場でのたたかいにしか、底辺の仲間の未来がない事が確認されました。誰かに救済を求めるのではなく、自らが立ち上がる事。連絡会の原点もまたそこにある事もまた共有されたと思います。

デモも元気に都庁前から中央公園へと「がんばろう東北」「がんばるぞ新宿」のかけ声を轟かせました。

新宿夏まつりも大盛況でした。

第18回目となる新宿夏まつりも500名あまりの仲間が集まり、こちらもいつも通り大盛況でした。

前夜祭から本祭へと２日だけのイベントでしたが、待ちに待ったお祭りだけに、仲間が率先して段取りを始め、動き動き、笑い笑いと、支え合い支え合いと、暑さと、どんよりとした世の雰囲気を吹き飛ばす取り組みが行われました。

新宿の夏まつりは、路上で亡くなった多くの仲間を、生き残った悼み、恨みつらみの路上を、しかし逆手にとり、そこで生きる事を宣言するようなお祭りです。短い取り組みですが、毎年楽しみにしてくれる仲間が大勢います。

最期は酒を飲み、炊出しを食べながらの納涼コンサート、お馴染みの五十嵐正史とソウルブラザーズさんなどのロックに酔いしれ、共に歌いと、いつもの通りのハチャメチャさで生きている実感を噛み締めました。

新宿連絡会　会計報告

2010年度決算と2011年４-10月報告

大変遅くなりましたが、2010年度の決算が出ました。

2010年期も引き続き多くの方々に支えられ、大きな赤字も出さずにやって来られました。数字では出てこない衣類、お米など現物の寄付も多く、大変助かりました。ありがとうございました。

2010年度　新宿連絡会会計収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
１計上収入の部		事務用品費	56,863
１寄付金収入	8,334,215	衛生管理費	19,032
		支払手数料	23,446
計上収入合計	8,334,215	車両費	111,121
		交際費	30,000
Ⅱ計上支出の部		修繕費	2,100
１事業費		新聞図書費	262
炊き出し事業	2,450,044	諸会費	10,000
越年越冬事業	1,241,349	事務所分担金	2,760,000
夏まつり事業	696,995	雑費	10,380
花見事業	98,256		
池袋支援事業	215,000	計上支出合計	8,569,039
その他活動事業	115,077	計上収支差額	-234,824
２管理費		前期収支差額	190,749
旅費交通費	123,500	次期繰越金	-44,075
通信費	514,895		
消耗品費	90,719		

2011年度4-10月期　新宿連絡会会計収支報告

収入)		支出)	
炊出部門寄付	953,623	炊出し事業費	1,055,433
夏祭り寄付	43,433	池袋支援費	85,000
その他寄付	3,371,833	活動費	244,043
前期繰越金	-44,075	夏まつり事業費	910,011
		衛生管理費	7,033
		旅費交通費	52,760
		通信費	116,869
		消耗品費	75.826
		車両費	50,707
		事務所費	1,610,000
		支払手数料	5,640
		諸雑費	44,627
		前期繰越金	-44,075
		次期繰越金	101,440
合計)	4,324,814	合計)	4,324,814

連絡会は専従なし、人件費なしの全てがボランティア活動、しかも集まったお金は右から左へと路上の仲間のために惜しみなく使い切ります。組織防衛より仲間の防衛第一。皆様のご寄付を路上支援へと責任をもって転嫁しています。こんな活動でも何かと物入りが必要です。今年度も昨年度に引き続き、資金カンパ、物資カンパを宜しくお願い致します。

越年越冬のためのお米や毛布、衣類など　急募！

今年も越年越冬のためのお米や物資を募集します。

衣類は男性もののみの募集となります。状態は古着でも構いません。防寒用の衣類は大歓迎です。また、毛布類も大量に必要となりますので、こちらもお願い致します。

年末年始は連日、一日２食の提供となり、いつもの時期よりもお米を消費します。お米は、古米でも玄米でも籾でも、もちろん構いません。着払いもオッケーです。お米券でも構いません。どうかお台所や納屋の隅に余っているお米がありましたら、１粒から寄付を受け付けております。いつも寒くて腹ペコのおじさん達のため、防寒用の衣類や、炊き出し用のお米の寄付、今年も宜しくお願い致します！

この冬、主に必要なものリスト		
毛布	寝袋	布団（軽いもの）
タオルケット	タオル	
男性もの防寒着	男性ものセーター類	
靴下、下着	帽子、マフラー	靴（革靴でも可）
ベルト	石鹸	シャンプー
ボディソープ		
ホカロン	食材	医薬品

＊このリスト以外でも受付可能な衣類はありますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

＊連絡会への衣類寄付は残すことなく路上の方々にお渡しています。フリーマーケット等への転売目的での募集ではありません。

＊女性ものの衣類は連絡会は受け付けておりませんので、ご容赦下さいませ。

2011~2012 やるせなき冬

第18次新宿越年越冬

2011年12月28日（水）～2012年1月4日（水）

＜ところ＞ **新宿中央公園～水の広場**

炊き出し準備　連日11時集合。炊き出し連日（28日は晩飯のみ）＜昼飯＞正午配食＜晩飯＞午後７時配食。医療テント（29日より）24時間体制。連日夜間パトロール、深夜、昼間も有り。夜は頑張れ越冬コンサート、新春映画祭など。31日は年末大イベント、正月は新春餅つき大会など仲間を励ます企画が今年も盛りだくさん。奇跡的の残ったインフォーマルな民衆史を見るなら、年末、中央公園に！

越冬闘争資金カンパ
毛布、ホカロン、
医薬品
募 集 中 !!

主催・新宿連絡会
090-3818-3450

詳しくは
http://www.tokyohomeless.com

●越冬活動カンパ　活動資金の振込は、　郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、http://www.giveone.net/「Give One（ギブワン）」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。）からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●越冬関連のカンパ物品送付先は以下の住所にお願いします●

★郵便物及び毛布、医薬品、米などのカンパ物品は
〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号　新宿連絡会　宛て
（平日9時～5時で受取が可能です）でお願いします。